

「携拳の信仰」

ヨハネの手紙第三 1:1~15

1. 真理

【新改訳改訂第3版】

Ⅲヨハネ

1:1 長老から、愛するガイオへ。私はあなたをほんとうに愛しています。

ヨハネの手紙第三。この手紙はイエシュアの12弟子の一人であったヨハネが、当時教会の教師であった「長老」としての立場から、その神から与えられたその権威によって「ガイオ」という一人の兄弟に宛てて書き送られたものです。実はこの「ガイオ」という名前は、使徒の働き19:29、20:4、ローマ人への手紙16:23、Iコリント人への手紙1:14にも記されていますが、それらがこのヨハネの手紙の人物と同じであるかどうかは諸説あり不明ですが、この手紙に記された「ガイオ」という人が一体どのような人物で、何をした人であったかということは、手紙の内容からいくつか推察することができますが、何よりもまずこの1:1に記されているように「ガイオ」という人物は、筆者であるヨハネに愛された人物であったと言えます。ヨハネは「愛するガイオへ。私はあなたをほんとうに愛しています。」というあいさつからこの手紙を書き始めています。しかしこの「ほんとうに愛しています。」という言葉は直訳すると「真理によって愛する」ということであり、「真理」という言葉が重要であると考えられます。「真理」とは一般的には「いつどんなときにも変わることもない、正しい物事の筋道。真実の道理」などと定義づけられていますが、物事の状況や内容、人の主観や考え方によってそれが指し示す物は実際には様々です。しかしヘブル語ではこれをエメット(אֱמֶת)と言い、この言葉は本来ある一つの目的を指し示しているということを前回のヨハネの手紙第二のメッセージでも述べました。

【新改訳改訂第3版】

創世記

24:27「私の主人アブラハムの神、【主】がほめたたえられますように。主は私の主人に対する恵みと**まこと**とお捨てにならなかった。【主】はこの私をも途中つつがなく、私の主人の兄弟の家に導かれた。」

これはアブラハムのしもべが語った言葉です。ここで「まこと」と訳されているのが聖書で最初に記されたエメットです。しもべは、その主人であるアブラハムから、その一人息子であるイサクの妻となる女性を見つけ出すという任務を受けて旅立ちました。そして彼は主人の命令に従い、主人の故郷に向かい、その兄弟の家に一人の女性リベカを見つけます。そこで彼は主のアブラハムに対する恵みと「まこと」のゆえに任務を果たすことができたと語っています。ですから本来エメット「真理」とは、イサクにリベカを与える、花婿に花嫁を嫁がせるという、一つの目的、計画を伴ったものであると考えられます。しかしこのイサクとリベカという存在はあくまでも象徴、「型」であり、それは究極的には御父の御子である、花婿なるイエシュアと、そして花嫁なる教会を指し示したものであると考えられます。ちなみにイサクとリベカを結び合わせたしもべとは御霊、聖霊の象徴であると考えられます。このように、ヘブル語の視点で考えるならば、「真理」とは花婿なるイエシュアと花嫁なる教会が、御霊によって結び合わされるとい

う、一つの神の目的、ご計画を指し示しており、その「真理」を互いに待ち望み、共に受け取る者である「ガイオ」、という意味が、この冒頭のヨハネのあいさつの中には込められていると考えられます。

2. 幸いを得る

1:2 愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。

「愛する者」、これはヘブル語ではヤーディード(אָדִיר)と言い、本来は「神に愛される者」という意味の言葉です。

【新改訳改訂第3版】

申命記

33:12 ベニヤミンについて言った。「**【主】に愛されている者**。彼は安らかに、主のそばに住まい、主はいつまでも彼をかばう。彼が主の肩の間に住むかのように。」

この言葉はモーセがその死の間際に、イスラエルの民を部族ごとに祝福して語った際、ベニヤミン族を祝福して語ったものです。ベニヤミンという名前には「右手の子」という意味があり、父の右に座る子、これは長子、または父の最も愛する子という意味があります。このように、「主に愛されている者」ヤーディードとは「主のそばに住まう」最も愛される者のことであると語られています。またこの「住まう、住む」と訳された動詞シャーハン(שָׁחַן)は本来、創世記 3:24 に記されたエデンの園を守るためにケルビムという御使いが置かれたことを意味する言葉です。ケルビムとは御使いの中でも神の最も近くで仕える存在で、それがエデンの園に置かれるとは神もまたそこに住まわれることを意味すると考えられ、すなわちヤーディード「神に愛される者」とは本来、エデンの園において、神のみそばにいつまでも仕える者、「住まう」者のことでもあると考えられ、神のご計画の視点で見ると、その完成である「神の国、御国」に入り、そこに神とともに永遠に住まう者、すなわち救いに与り、永遠のいのちを持つ者のことが指し示されていると考えられます。

そしてヨハネは「愛する者」であるガイオが、「幸いを得」るようにと祈っています。ヘブル語ではここにヤータヴ(אָטַב)「良い、うまくいく、喜ぶ」という意味の動詞が使われています。この言葉の本来の意味を見てみましょう。創世記 4:7 です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

4:7 あなたが**正しく行った**のであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」

この御言葉は、神がアダムの息子カインに語られたものですが、ここで「正しく行った」と訳されているのが聖書で最初のヤータヴです。実際カインは正しく行わなかったのですが、正しく行うとは神に「受け入れられる」ことであることが示されています。ここで「受け入れられる」と訳されているヘブル語はナーサー(נָסָא)と言い、口語訳と新共同訳では「顔を上げる」と訳されており、本来は「上げる、上る」と

いう意味の動詞です。ですから「幸いを得る」、ヤータヴとは神に受け入れられ「上げられる、上る」ことであると考えられ、これは神のご計画の視点で見ると教会の携挙、イエシュアの空中再臨を指し示していると考えられます。それは以下の預言が成就することを指します。

【新改訳改訂第3版】

I テサロニケ人への手紙

4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、

4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

キリストすなわちメシアであるイエシュアを信じる私たち教会は、この預言の成就を希望にして歩んでいます。私たち教会にとってここに記されているように「引き『上げられる』」ことは最高、究極の「幸いを得る」ことを意味します。この教会の携挙、イエシュアの空中再臨に与れなければ、私たちが今どんなに健康でも、どんなに豊かになっても、何の意味もありません。なぜなら今のこの時代、この地上は、後に建てられる「神の国、御国」の前にすべて滅び失せるからです。そしてその時私たち教会はイエシュアの花嫁として、このように「上げられる」と同時に、この滅びを免れるのです。ですから「幸いを得る」とは本来、私たちが滅びから救われ、イエシュアの花嫁として迎えられるという神のご計画の成就を指し示した、非常に重要な、私たちにとって絶対に得なければならない幸いであるということが指し示されていると考えられます。

このように、一見ただの事例のあいさつのように見られる言葉の中にも、神はそのご計画を表しておられ、探し求める者にそれを明らかにして下さることを知らなければなりません。

3. 真理に歩む

1:3 兄弟たちがやって来ては、あなたが真理に歩んでいるその真実を証言してくれるので、私は非常に喜んでいきます。

1:4 私の子どもたちが真理に歩んでいることを聞くことほど、私にとって大きな喜びはありません。

ヨハネはガイオが「真理に歩んでいる」ことをこれ以上ない「大きな喜び」だと言っています。先ほども述べたように、「真理」とはアブラハムのしもべの働きによってイサクとリベカが結ばれた出来事を「型」とする、御父である神の御子イエシュアが花婿のように花嫁である私たち教会と結ばれるという神のご計画を指し示すものです。それは同時に教会の携挙、イエシュアの空中再臨すなわち先ほどの I テサロニケ 4:16、17 の預言が成就することを意味します。この約束とも言える神のご計画を信じ、受け入れ、期待し、その実現を待ち望む姿勢、これこそが「真理に歩む」ことのその本来の意味であると考えられます。そしてこれも前回述べましたが「歩む」と訳されているヘブル語ハーフ(הָלַךְ)とは本来、創世記 2:14 に示された「川が流れる」ことを意味しており、一般的に捉えられているような、自らの力で立ち、一步一步前進していくというものではなく、ただ神の御心のまま、その導かれるまま、その流れに身を委ねる生き方を指し示していると考えられます。この世は人に自分だけの夢を描くことを勧め、それぞれ目標を

持たせ、自分らしくと歌いながら、自分本位の、つまり自己中心的な、すなわち自分勝手な生き方をさせようとしませぬ。しかし私たち教会はバラバラであってはなりません。花婿なるイエシュアの再臨を待ち望む花嫁としての姿勢、考え方、生き方において一つでなければなりません。私たち教会にとって目標とは、夢とは、この世で成功的な働きをすることでも、快適で平安な暮らしをすることでもありません。ただイエシュアが迎えに来て下さること「上げられる」ことだけであるべきだと思われませぬ。しかしだからと言って私たちが何もせず、ただイエシュアを待ち望んでいれば良いということではありませぬ。次の節でヨハネは「真理に歩む」がなすべき「真実な行い」について述べています。

4. 旅人をもてなす

1:5 愛する者よ。あなたが、旅をしているあの兄弟たちのために行っているいろいろなことは、真実な行いです。

筆者であるヨハネは、愛するガイオが「旅をしているあの兄弟たちのために行っているいろいろなこと」を「真実な行い」であると述べています。たしかに当時旅人をもてなすことは美徳なこと、賞賛されるべきこととされてきました。しかし重要なのは旅人をもてなすという行為そのものにあるのではなく、その行為が指し示す「真実」にあると考えられます。マタイの福音書の中で、イエシュアは旅人をもてなすことの意味を説いておられます。

【新改訳改訂第3版】

マタイの福音書

25:31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。

25:32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、

25:33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。

25:34 そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。』

25:35 あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、**わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、**

25:36 わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』

25:37 すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。』

25:38 いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。』

25:39 また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』

25:40 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』

このように、旅人をもてなすことと、「世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぐ」ということとに密接な結びつきがあることが解ります。私たち教会は、旅人、貧しい人や困っている人に手を差し伸べますが、それらの働きはすべて「御国を受け継ぐ」というイエシュアの語られたこの御言葉によって行わなければならないと思われます。またヨハネが指している「旅をしているあの兄弟たち」とは文脈的には聖書の御言葉を宣べ伝えるために各地に出かけて行く、今で言うところの宣教師や伝道者を指していると考えられます。

1:6 彼らは教会の集まりであなたの愛についてあかししました。あなたが神にふさわしいしかたで彼らを次の旅に送り出してくれるなら、それはりっぱなことです。

ガイオという人物は「神にふさわしいしかた」で福音を携えて各地に出かけて行く宣教師や伝道者のような神の働き人たちを助ける人であったようです。この「神にふさわしいしかた」という表現は、先ほどのマタイ 25:40 の『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』という御言葉に結びつくと考えられます。つまり筆者ヨハネは「世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。」と言われたイエシュアの御言葉を思いながら、これからもその働きをするようにとガイオを励ましているのだと考えられます。

これは私事です、私たち家族が大阪からこの北海道に移って来てもうすぐ 10 年になるうとしています。本当に「最も小さい者たち」であった私たちを、銘形先生ご夫妻を始めとするこの教会の兄弟姉妹が温かく受け入れ、迎え入れてくださいました。そしてこの教会を通して神は私たちに食べ物を与え、そして何より聖書の御言葉によって私と私の家族を養い、まさに「もてなして」くださいました。そして最近では少しずつではありますが、御言葉を携えて遠方へ出かけて行くようにもなりました。そのような意味において、私たちにとってこの教会はまさに「ガイオ」の教会のようだと、この書簡を読みながら強く思われ、心から神に感謝しているところです。

1:7 彼らは御名のために出て行きました。異邦人からは何も受けていません。

1:8 ですから、私たちはこのような人々をもてなすべきです。そうすれば、私たちは真理のために彼らの同労者となれるのです。

「異邦人からは何も受けてはいません。」とは、神の働きだけに専念し、他に生活を支えるための仕事や働きを持っていないことを意味すると思われますが、異邦人から受けるものは何も経済的なことだけではありません。異邦人の考え方、生き方、それはつまり神を度外視した、人中心の物事の捉え方、すなわち「反キリスト」です。私たちはこれらの影響を受けない人、拒絶する人すなわち神を中心とした、神の御心、ご計画に視点を置いた考え方、生き方を「もてなす」こと、その考え方、生き方を受け入れる、交わることが勧められていると思われます。なぜなら「真理」とは教会に与えられた神のご計画を指し示すものだからです。神のご計画に視点を置いた人々とともに生きる、歩むことがこの「真理のために彼らの同労者となれる」という言葉の指し示す意味であると思われます。

5. 善と悪

1:9 私は教会に対して少しばかり書き送ったのですが、彼らの中でかしらになりたがっているデオテレペスが、私たちの言うことを聞き入れません。

1:10 それで、私が行ったら、彼のしている行為を取り上げるつもりです。彼は意地悪いことばで私たちをののしり、それでもあきたらずに、自分が兄弟たちを受け入れないばかりか、受け入れたいと思う人々の邪魔をし、教会から追い出しているのです。

デオテレペスという人物の実際に行っていた悪がここには記されていますが、これは一つの「型」を表しているたとえでもあるのではないかと考えられます。つまりここに記された「私」とはイエシュアのご計画を指し示す「真理」のごことで、「教会に対して少しばかり書き送った」とは、聖書に記されたイエシュアと教会についての神のご計画を指し示す「真理」のごことで、「デオテレペス」とはその「真理」を受け入れない指導者、リーダーを指しているということです。「それで、私が行ったら」とは花婿なるイエシュアが花嫁なる教会を迎えに来られる「教会の携挙、イエシュアの空中再臨」、Iテサロニケ 4:16、17の成就です。その時「彼のしている行為を取り上げる」、つまり教会は携挙されるが、この真理、神のご計画を信じなかった指導者たちは残されることが示されていると考えられます。つまりイエシュアの空中再臨によって携挙される者とは、「教会に対して少しばかり書き送った」この携挙の預言を「聞き入れ」た者のことであり、これを「聞き入れ」ない者は、たとえ聖書を読み、神を信じていると言っている者でも携挙されず、滅びゆく地上にとり残されてしまうことがここに示されているのではないかと考えられます。

1:11 愛する者よ。悪を見ならわなくて、善を見ならいなさい。善を行う者は神から出た者であり、悪を行う者は神を見たことのない者です。

「善」と「悪」。「善」とは何でしょうか。そして「悪」とは。それぞれの持つ意味を、ヘブル語の最初の言及から考えてみましょう。

【新改訳改訂第3版】

創世記

1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

1:4 神は光を見て**良し**とされた。神は光とやみとを区別された。

「神は光を見て『良しとされた。』」と訳されているのが聖書で最初の「善」トーヴ(טוֹב)です。つまりトーヴ「善」とは本来、「光」を指し示していると言えます。では「光」とは一体何でしょう。ヘブル語でこれをオール()と言い、1:3の記述から、「光」は神の仰せによって現れた最初の存在です。ですから「光」には神の仰せ、言葉、命令を目に見えさせる、目に留めさせる、明らかにする、実現させるという意味があると考えられます。つまり「光」とは神の御心、ご計画を明らかにし、実現、完成させる存在であると考えられ、目に見えない神が見える形となられたイエシュア、御父の御心、ご計画のためだけに来られたこの神の御子イエシュアこそが「光」であり、この御方を見ること、この御方だけに目を留めることが「善」トーヴの本来の意味であると考えられます。そして次に、「悪」はラ(רָע)と言う非常に短い言葉です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

2:9 神である【主】は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木を生えさせた。

神がエデンの園の中央に生えさせた二本の木、「いのちの木」そして「善『悪』の知識の木」、ここに聖書で最初のラが記されています。永遠のいのちをもたらす（創世記 3:22）「いのちの木」に対して、「善悪の知識の木」は「それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。（創世記 2:17）」という「死」をもたらし、また「善悪の知識の木からは取って食べてはならない。」という神の命令に聞き従わないことを意味します。このように「悪」ラとは本来、「神への反逆」と「死」という意味であると言えます。

当然のことながら、ヨハネは「善」を見ならうよう勧めています。それは述べたように「光」であるイエシュアに目を留めることです。そしてイエシュアに目を留めるとは、イエシュアが成し遂げ、さらにこれから成し遂げようとしておられる、実現しようとしておられる神の御心、ご計画に目を留めるということです。そのために私たちができることはやはり聖書を学ぶことだと思われま

1:12 デメテリオはみなの人からも、また真理そのものからも証言されています。私たちが証言します。私たちの証言が真実であることは、あなたも知っているところです。

デオテレパスに続いて、デメテリオという人物のことが唐突に記されていますが、文脈的に見て先ほどのデオテレパスは「悪」を見ならう悪い模範、そしてこのデメテリオは「善」を見ならう者、すなわちイエシュアに目を留める者の模範として挙げられているのだと考えられます。そして彼は「真理そのものから証言される」者であり、「みなの人、私たち」すなわち教会全体から認められた者だと記されています。「真理」とはイサクとリベカの出来事に表された、花婿イエシュアと花嫁なる教会との結婚という神のご計画を指し示し、I テサロニケ 4:16、17 の預言の成就である教会の携挙、イエシュアの空中再臨を指し示していると述べました。ですからこのデメテリオとは教会に与えられた「真理」、教会の携挙、イエシュアの空中再臨に対する信仰を持っている人を表していると考えられます。そしてその信仰は、他の教会員にも認知されることの必要性が示されているとも考えられます。つまり私たちは教会の携挙、イエシュアの空中再臨についての信仰を教会全体で共有し、常に分かち合う必要があるということだと考えられます。

6. 顔を合わせて

1:13 あなたに書き送りたいことがたくさんありましたが、筆と墨でしたくはありません。

1:14 間もなくあなたに会いたいと思います。そして顔を合わせて話し合しましょう。

この表現はヨハネの手紙第二にも見られる、ヨハネの言葉の中に表されたイエシュアの思いではないかと考えられます。つまりイエシュアについて、神のご計画について「筆と墨で」記されていないこと、つまり聖書に記されていないことが多くあり、それはイエシュアと「顔を合わせて話し合」う時に明らかに

されるということ、そして「間もなくあなたに会いたいと思います。」という言葉の中に、イエシュアの再臨の時がもう間もなくであるということが表されていると思われます。

7. 平安

1:15 平安があなたにありますように。友人たちが、あなたによろしくと言っています。そちらの友人たちひとりひとりによろしく言ってください。

前回のメッセージで「平安」へブル語でシャーローム(שלום)は、創世記 15:15 の御言葉に由来し「父のみもとに行く」ことを指し示していると述べました。そしてそれは弟子たちのもとを離れ、御父のみもとに行かれたイエシュアを指し示し、ヨハネの福音書 14:2、3 に記された、私たちが迎える場所を父の家の中に備えるという目的があり、そのようにして再び迎えに来られることを意味していると述べました。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネの福音書

14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

一般的に「平安」とは、何事もなく心が穏やかな様子を指しますが、神の提示する「平安」は、想像しただけでもわくわくするような、心躍るような喜びと楽しみの絶頂です。なにしろ神の御子であるイエシュアをついにこの目で見ることになるのですから。また私たちの身体は朽ちることのない、痛みを覚えることも、疲れることさえない、永遠の身体に替えられるのですから。また鷺のような翼が与えられて空を飛ぶ事さえできると聖書は語っています。私たちはこの心躍る神の「平安」をもってシャーローム！「平安があなたにありますように！」とあいさつを交わしましょう。

【新改訳改訂第3版】

イザヤ書

40:31 しかし、【主】を待ち望む者は新しく力を得、鷺のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。